

# 光の中にひそむもの——大泉黒石「黄夫人の手」考

山本歩

房子は全身の戦慄と闘ひながら、手近の壁へ手をのばすと、咄嗟に電灯のスウイッチを捻つた。と同時に見慣れた寝室は、月明りに交つた薄暗がりを払つて、頗もしい現実へ飛び移つた。寝台、西洋、洗面台、——今はすべてが昼のやうな光の中に、嬉しい程はつきり浮き上つてゐる。(中略)いや、しかし怪しい何物かは、眩しい電灯の光にも恐れず、寸刻もたゆまない凝視の眼を房子の顔に注いでゐる。彼女は両手に顔を隠すが早いか、無我夢中に叫ばうとした。が、なぜか声が立たない。その時彼女の心の上には、あらゆる経験を超越した恐怖が、……<sup>(1)</sup>

芥川龍之介の怪奇小説『影』(『改造』一九二〇年九月)の一節である。端的に言えばドッペルゲンガーものと言える同作だが、緊張と恐怖の極限はこの、具体的には何も現れてはいない曖昧な場面に訪れる。闇を恐れて点された「眩しい電灯の光にも恐れず」、むしろその下でこそ「何物か」の存在感は強くなる。闇を恐れた近代人が手に入れた文明の火は、しかし怪物を駆逐しなかつた。

思えば芥川は『妖婆』(『中央公論』一九一九年九月・一〇月)においても「大正の昭代」、「文明の日光に照られた東京」に怪談を顕現させようとし、わざわざ「電柱の根元」に「大きな人間の眼」を出現させている。<sup>(2)</sup>大正期半ばの怪奇小説は、電気に代表される近代文明の下に如何に怪談的なものを表象できるかといふ一つの課題を抱えていたのではないか。

芥川の『影』発表の八ヶ月前、大泉黒石は『中央公論』新年号に「黄夫人の手」を発表した。舞台は長崎市内、中国人「黄塵来」と知り合つた「藤三」は、やがて黄一家を巡る奇怪な因縁に巻き込まれていく。塵来の伯父・黄隆泰なる男が藤三

に語るところでは、塵来の生みの母・添嫗(黄夫人)は「窃盜狂」であり、その遺伝を恐れ、あろうことか神に息子の死を誓つた。結局、夫人は殺人の罪で刑死したが、切り取られた彼女の手が塵来を祟つて動き回るというのだ。その話を聞いた藤三の部屋にも女の手首が出現し、彼は恐怖に満ちた一日を送ることになる。

同作は発表年の八月、作品集『恋を賭くる女』(南北社)に収録された。管見の限り、一九二三(大正一二)年七月、作品集『血と靈』の収録時に改稿が行われている。一部の口上が変更された他、初出～初刊時には夢オチ——「私が見た大正九年の初夢を、そつくりお話申上げた」とされた結末が変更されている。語り手が「手」の出現について、斬られた狛犬の首が大蛇に食らいついた故事を引きながら合理的な説明を試みるものに変更された。「黄夫人の窃盜癖が消滅しない限り、その窃盜癖と云ふものを信ずる人にだけは、かうして明らかに見ゆるのではないか」という末文は、「窃盜癖」自体が隆泰の嘘であることをほのめかしてもいるようだが、物語内容を満足に説明し得るかどうか、仔細な検討が要される。

同作の内容は不可解だ。出来事は多様な解釈を許し、全容は把握できない。全ては隆泰の虚言・妄言かも知れないし、藤三の克服し得ぬ中国人への偏見から来る幻覚であるかも知れない。いずれにせよ作中の怪事は動く「手」の仕業という域を超えており、その魔力の範囲も不詳に終わる。

「黄夫人の手」は怪奇の断片の中を放浪する小説である。そして藤三(あるいは彼を語る語り手)を媒介として、読者は断片にからうじて語彙やモチーフの連続性を見出す。藤三は内と外を往還する主人公ではなく、二分法の成立しない断片の群を、からうじて繋ぎ止める閑節である。作品の一貫性・完成度という意味で

は評価できない同作であるが、代わりに得も言われぬ不気味さを獲得している。こうした未成感は現代の「実話怪談」に近しい。

\*\*\*

さて、このような断片のひとつとして、同作には電灯に関係する出来事が複数登場する。まず、「四」において藤三の盲目の祖母が、料理中に醤油と間違えて石油を入れてしまう、というくだり。

「それがお前。電灯と云ふものがあるものをつい忘れてもうランプの油が切れる頃と思ふて懶々墓地下へ買ひに行きましたのさ」

この森の中へ電線が引かれたのは、既に二カ月も前のことでした。

すなわち、「二カ月」前から電気を使用した電灯を使用していたにも拘わらず、

「ランプ」——石油灯の油を買ってしまったというのだ。この日、彼女は他にも、使つたことのない（盲目であるために）鏡台を押入れから持ち出し眉毛を抜こうとする、といった常とは異なる行動で藤三を不審がらせている。祖母の奇妙な動作は物語の不気味な雰囲気を盛り上げるものであるが、「手」の怪異との関連は明示されないままに、しかし繰り返し描き留められる。

「七」において、黄夫人の怪に脅かされた藤三が「バア」に入店すると、「天井から釣るした大きな電灯の光が、ぼうつと暗くなつて家全体がぐらぐらと揺らぐやうな気が」という描写がある。この後、店内の客すべてが「手首を厳しく握られた」感覺を覚える、大規模な怪異が発生する。

藤三が悪夢を見る箇所（「七」～「八」）で電灯は最も強調される。ここでも、藤三に「眩い光の下では、眼めらめ」があるを知るはずの祖母が「電気は、点けとこうかの？」と常ならぬことを言う。まるで藤三が「手」のために暗闇を恐れているのを見抜いたかのようだ。さらに彼女は明るさを調節するのだと、電灯を風呂敷で覆うのだが、それが前段で藤三が「手」を包んでいた風呂敷なのだから不気味だ。結局藤三は電灯を消して眠りに入るが、恐ろしい悪夢を見ることになり得ない時間に送電されているという意味で、ここでは異常なことが起こってい

る（この悪夢も、本筋とどのように連動するのかが不明瞭である）。夢の中の印象的な小道具は「赤いランプ」である。これは灯油ランプだと思われる。「四」で電灯と並置されたランプがここで登場することに、何か意味はあるのだろうか。ともあれこの夢から覚めると「消して寝たと思ふ電灯がぼうと点いてゐる」。「午前六時限り、几帳面に消ゆることを決して違へたことのない」電灯が「明々と輝いてゐる」たのである。藤三が外へ出た後も、「二階の電灯は、ほつと光つてゐた」。電気については、最後にもう一度、謎めいた形で言及される。「電灯引込みを勧誘して廻つたこの辺の有志者」が「ややさん」——塵來の育ての母の、父親だったのである（九）。この、言わば塵來の義理の祖父が、隆泰の素性をほのめかし、「手」のねらいは隆泰であるということを教えてくれるのだが、それも全ての空白を埋めるには至らない。

\*\*\*

長崎に電灯事業が興つたのは一八八八（明治二二）年、株式会社長崎電灯によるものであるが、もちろん家庭での電灯利用が普及するのはなお時間がかかる。「黄夫人の手」の時間設定は執筆・発表時の大正八（九年）だろうか。一方、藤三を作者・黒石の似姿として、黒石が伊良林に住み鎮西学院中学校に通つていた一九一三（大正元）年～一九一四（同三）年頃だと考へることもできよう。いずれにせよ、家庭用電灯の普及が進む大正前半期を舞台とした作品だろう。

貧しい家庭であるにも拘わらず「電灯は点けとこうか」と祖母が提案していることから、電気は従量制ではなく定額制である。先述のように、「バア」入店時には電灯が暗くなる描写がある。また藤三の就寝時に祖母は電灯が明るすぎるのではないかと案じている。これらの箇所から藤三の周囲の電灯は大正期に入つて発達した、金属をフィラメントに使用した電球ではないかと思われる。それでも炭素線電球やガス灯に対し、これは強い光を放つた。このような眩しさを背景として、「黄夫人の手」は展開する。そして電灯は「午前六時には几帳面に消え」とあるから、送電は夜間のみ行われ、朝になれば停止する半夜灯である。あり得ない時間に送電されているという意味で、ここでは異常なことが起こつてい

る。何らかの干渉によつて電灯が点るのである。それは祖母が電灯に風呂敷を被せたことと関係しているのだろうか。

「ややさん」の父が「電灯引込み」を担つていたことを思えば、電灯にまつわるサブ・プロットが準備されていた——が、時間的制約や紙幅の都合で緩られなかつた——のではないか。そのように想像したくなるほど、同作において電灯は謎めいた存在感を放つている。少なくとも「黄夫人の手」においては、電灯という近代生活の象徴、科学の産物が怪異の媒介となる。そこに、動く「手」が如何なる作用を及ぼしているのかは定かではないが、少なくとも何者かの干渉を感じて読者はぞつとする感覺に陥る。

\*\*\*

前段の「ぞつとする」という表現はマーク・フィッシュナーの用語「the eerie」を意識したものだ。フィッシュナーによれば、「ぞつとするものの感覺は、何もないはずのところに何かが現前しているときや、何かがあるはずのところに無が現前しているときに生じる」のだが、ここで重要なのが行為主体性（エージェンシー）の問題である。すなわち、何かしらの意図を持った行為主体（エージェント）の予感や痕跡である<sup>(5)</sup>。

電灯の明滅に、藤三や読者は黄夫人の行為を感じざるを得ない。無論この感じは非科学的である。電灯を明滅させるものは、一に電気の流れでしかあり得ないからだ。それでもなおぞつとするのは、そもそも電気の流れなるもの自体が知覚困難であるからだろう。それはどこからやつてくるのか。誰が流しているのか。送電システムや集中管理のあり方は、電灯の下にいる人々には見えないけれど、しかし確実に存在している。見えないけれど存在するもの。何らかの行為主体を、生半可に想像させるもの。しかもそれは、確かに我々の元に辿り着く。こうした「電気」の性質が、いづこから干渉してくる怪異と親和性を持つことは、意識されてよい。

加えて言えば、「電気」は外部だけでなく、我々の内部にも流れている。生物の体内の微弱な電流——生体電氣にも、この時期の黒石はオカルト的な関心を寄せ

ていたようだ。

先述の通り、「黄夫人の手」は『血と靈』収録時に改稿されている。同書において、表題作「血と靈」には「プロローグ」があり、そこには「O」という友人から「この一巻に収めた『血と靈』その他の神秘的な話を聞い」たという、いわば収録作を粹物語化する一節が登場する。翌年の作品集『黄夫人の手』（春秋社）では、同様の「プロローグ」は「血と靈」から独立して巻頭に配された。すなわち、『血と靈』においては表題作の名が記された中扉以降に「プロローグ」が配され、その対し、『黄夫人の手』は本扉・目次に続いて「プロローグ」が配され、その後「血と靈」中扉という順序となっている。作品集『黄夫人の手』では、作品集全体の序文としての性格が強められ、その内容は所収の全作——「血と靈」以降の「黄夫人の手」「天女立像」「女人面」「聖母觀音」——にかかるべく。さて、この両「プロローグ」において、人体を流れる「電気」が他者に作用する」とが熱弁されている。

たとへば甲と云ふ男と、乙と云ふ女とが、手をつなぐと、二人の男女は、さながら感應電流に於ける輪道の觀を呈し、二者の間に電気が生じ、且つ一方へ流れる事実がわかりました。面白いことは、この甲と乙との心の間に何の感情もなく、冷やかなものであればあるほど、電気は起りません。それは親子であるか或は恋人同志であるとき、最も強いと云ふほどまでわかつてゐる今日、別に取り立て、言ふほど不思議なものではないかも知れませんがね、甲の熱情が、甲の肉体の瞬間的な破壊によつて眺び去るとき、その熱情や意志は、エーテルの波動と同じく、乙に伝はるか、さもなければ、殆んど同質同形の血液をもつた他の人に感應するものです。<sup>(6)</sup>

これは「黄夫人の手」改稿後の末尾に対応するものであり、改稿と影響関係にあることは明らかである。

これを踏まえれば、窃盗への欲望や、塵来の命を奪う誓い、あるいは隆泰への殺意——いずれか、あるいはすべての「熱情」を秘めた状態で切斷された「手」は、「電気」のようなエネルギーに動かされないと解釈できる。この「手」は、

身体および精神の延長として駆動する、一種の道具と見る」こともできる。

＊＊＊

電気の放つ明るい光も、入り組んだ因縁を解きほぐしはしない。語られる「」の真偽を明らかにする」ともない。むしろ「」からかやつてくる電流は得体の知れない来訪者である。怪異は電気と相反するものや縁遠いものではない。むしろ、何者かの仕業で、どこかからやってきて、我々と繋がり得る電気なるものは、極めてぞっとする感覚をもたらす意味で怪異に類似する。「七」における悪夢で旧式の「ランプ」が血みどろの惨劇を照らし出すのに比して、目覚めた藤三を包むのは新式の眩い光である。その光の中に、もっと不可解で、もっと曖昧で、それ故に尽きない不安をもたらす、新時代の「怪談」がひそんでいる。

## 注

- (1) 芥川龍之介「影」、引用は『芥川龍之介全集第一巻』(一九二八(昭和三)年一月、岩波書店)五九三頁より
- (2) 芥川龍之介「妖婆」、引用は『芥川龍之介全集第三巻』(一九五四(昭和二九)年、岩波書店)二〇四、一二七頁より※なお、没後すぐの『芥川龍之介全集』には本人の意向により「妖婆」は収録されていない。
- (3) なお、『中央公論』初出時には老人の発言「電灯を引きりますのに五十人以上の申込者がなければ、どうしても会社の方で承知いたしません」(二五五頁)において「会社」に「やさかまち」というルビが振られている。「やさかまち」は「八坂町」(作中の「寺町」の南側にあたる、現在の長崎市油屋町・鍛冶屋町付近)と考えられる。文脈上、「会社」は電力会社を指すはずだが、現時点では不詳。ただ、すぐ近くの本石灰町九番地には九州瓦斯株式会社があり、ガス灯事業を手がけていた。一九一四(大正三)年には長崎電灯株式会社と合併、長崎電気瓦斯株式会社となり、本店も袋町一番地となつた(『官報』一九一四年八月一二日)。これが誤認され、電力会社の所在地とされた可能性はある。
- (4) 嘉村國男監修『長崎事典 産業社会編』(一九八九(平成元)年六月、長崎文献社)等
- (5) マーク・フィッシャー／五井健太郎訳『奇妙なものとぞつとするもの——小説・映画・音楽、文化論集』(一〇一一(令和四)年一二月、Pヴァイン)一〇〇～一〇四頁(原著: The Weird and the Eerie, Repeater Books, 2016)
- (6) 『血と靈』一頁

(7) 同五頁

「黄夫人の手」の引用は春秋社『黄夫人の手』による。また、それを含めたすべての引用は、原則として旧字を新字にあらため、ルビを省略した。

なお、本稿は松本常彦氏の講演「光る国へ・戦間期篇」(近代文学会九州支部秋季大会 一〇一四年一月三〇日)に示唆を受けたものである。この場を借りて感謝申し上げる。